

講演：Rethinking “The Liberation of Sound” の報告

水野みか子

開催日：平成 29 年 9 月 5 日(火)

開催場所：名古屋市立大学北千種キャンパス大講義室

活動形式：講演

参加人数：約 70 名

桐朋学園大学教授の沼野雄司先生による講演 *Rethinking “The Liberation of Sound”* は、平成 29 年 9 月 5 日～8 日に北千種キャンパスで開催された国際会議「電子音響音楽国際研究ネットワーク 2017 年大会 (EMS2017)」の基調講演として企画され、環境デザイン研究所との共催で広く公開された。講演と質疑は通訳無しで英語で進められた (図-1)。

沼野先生は音楽学がご専門であり、20 世紀半ばの音楽をテーマにしたご研究により東京藝術大学大学院で博士号を取得された。博士研究を元にした『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ:前衛の終焉と現代音楽の未来』(2005)、『光の雅歌』(2005)、『ファンダメンタルな楽曲分析入門』(2017)などの御著書が出版されている。沼野先生や水野を含む 10 人のメンバーから成る「日本戦後音楽史研究会」は、十年ほど前に上下 2 巻から成る『日本戦後音楽史』(2007)を平凡社から発刊したが、この音楽史は、信頼できる日本現代音楽史として海外でもしばしば参照されている。

沼野先生の今回の講演は、「貧弱で非論理的言語である音楽の表現を革新的に変える力を持つものは科学の活力をおいてほかに無い」という、エドガー・ヴァレーズの引用に始まり、<organized sound>とヴァレーズが呼ぶところの音楽を、空間に投影されるサウンドとして考察してきた思想家・美学者の概念アンソロジーという形をとっていた。講演タイトルに含まれる<The Liberation of

Sound>は、音楽の未来に関するヴァレーズの論考集のタイトルでもあり、新しい楽器やオーケストレーションを求めたヴァレーズは、「サウンド・ビーム」というイメージを常に抱いていた。1930 年代に作曲された『エスパス』や 1958 年ブリュッセル万博でのル・コルビュジェとイアニス・クセナキスとの協働上演『ポエム・エレクトロニック』では、空間表現が戦略的に実現されたが、ヴァレーズの先鋭的な考えに対して技術は不十分なものだった。



図-1 講演中の沼野雄司先生

講演では、ハイデッガー、エイブラハム・モールス、アンリ・ルフェーヴルらの思想が取り上げられ、物理学、心理学、社会学へと展開していく空間概念が電子音響音楽で実現された事例も論じられた。特に詳しく論じられたのが、空間の実践、空間の表現、表象的空間、という空間の三つの様相であり、これが地理学のように社会的空間を特定するという点が強調された。

沼野先生の講演は、今日の技術環境における音楽表現に対して示唆の多い内容であり、研究者にとっても実践家にとっても極めて有益であった。